



ほっとはうす、みんなの家

作成者：薬学科 3年 安達泰葉、久留佳奈

概要

09年1月20日（火）に矢原先生と白崎先生引率のもと、胎児性・小児性水俣病患者さんの共同作業所である「ほっとはうす」に行きました。

ほっとはうすについて

「ほっとはうす」は熊本県水俣市浜町あり、胎児性・水俣病患者などの障害を持つ人の共同作業所であり、喫茶コーナーの営業、押し花、ポプリなどの自主製品の製造・販売などを行っています。また、患者さんとの交流を通じて水俣病を伝える活動をしています。今回は患者さんのお話を聞き、その後一緒にしおり作りをしました。



患者である永本賢二さんのお話。パネル持っているのは施設長の加藤タケ子さん。



一緒にオリジナルのしおりを作りました。楽しく、和気あいあいと作業できました。



小学校の子供たちがつくった歌、「海」を全員で合唱。



最後はしっかりと握手してお別れしました。皆さんの手はとても温かく優しいでした。

～感想～

•ただ、水俣というだけで偏見を受け、水俣病は奇病・伝染病なのでうつるといった差別があったことを、患者の方の口から直接聞いたとき、心が痛かった。勝手な誤解がどれだけ患者を苦しめるのかということが痛いほど伝わった。患者の方々と触れ合った貴重な体験を私はこれから大事にしていこうと思う。(薬学科3年・T.K)

•赤ちゃんのように扱われるのが嫌だけれど、それは親切でやってくれていることだから言えないという靖子さんの話がとても印象的でした。今まで私は相手が親切心からしてくれたことを「そんなことしないでいいから」と相手の気持ちを考えずに断り、相手を傷つけていたことがなんだったのだろうと思い、強いだけでなく、優しさも持っていて、人としてとても尊敬しました。(薬学科3年・K.T)

•ほっとはうすの皆さんは確かに重い障害を抱えていらっしゃるんですが、生き生きとした表情で私たちの目の前に現れました。メンバーの方の中にはしゃべることが難しい方もいらっしゃいましたが、話を聞いていくうちに、本当に聞こえるようになってきて、人と人のコミュニケーションはこういうことなんだと実感できました。(薬学科3年・A.T)

•私にはできないこと、まねできないことを患者さん方は持っている。でも実は私はいずれのことではできないのではなく、ただしようとしないだけなのかもしれない。何事も勇気がなくて行動できないだけで、人に寄り添いその人の気持ちになろうとしないだけなのかもしれない。水俣病患者さんの強さ、優しさに触れ、自分の弱さを知った。(薬学科3年・S.M)

•感情をこめて自分の経験を一生懸命語りかけてくださった皆さんの話はとても生々しく、どんな文獻で読んだ体験談より重く響きました。(薬学科3年・Y.Y)

•被害者は何故裁判を起した？ 慰謝料が欲しかったから？ チツソ職員に罪の意識を背負わすため？ きっとそんなものじゃないと自分は思う。彼らは当たり前に入りにやらずだった当たり前の生活、以前と変わることのない日常をただ返して欲しかったんじゃないのだろうか。訴えたとこでその「当たり前」は返ってくることはない。訴える声は「私はどうしたらいいのか」という憤怒、悲哀、苦痛その他いろいろな感情が混ざった声ではないのだろうか。(薬学科3年・K.K)

•水俣湾周辺に当時住んでいた人々も水俣病にかかる可能性はおおいにあったはずなのに、何もわからない子供に「補償金があるからいいねえ」など心ない言葉を発したまわりの大人は私には信じられない。お金にはかえられないわけがない、一生背負っていかねばならない、苦しみ、悲しみ、痛みが山ほどあるのに。そのような差別がさらに苦しみを生んだのではないだろうか。(薬学科3年・R.M)

•ひどい差別を受けてきた「ほっとはうす」の方々が、明るく生活し、水俣病に関する話を直接近隣の子供たちだけでなく、他県まで訪れて伝えている姿や、水俣病による障害があっても、社会へ貢献しようとしている姿にとっても感銘を受け、勇気づけられた。(薬学科3年・Y.H)

•訪れる前、「ほっとはうす」の方々は暗い感じで、水俣病という事を引け目に感じているのかと思っていた。しかし、実際はそうではなく、みんな笑顔で明るく、そして一生懸命話をしてくれた。障害と同時に心の闇を抱えながらも今日まで生き、一生懸命に水俣病について話す姿は、患者さんが水俣病を乗り越え新しい未来に踏み出す意志の表れだと思う。(薬学科3年・N.K)

•皆さん色々なお話をされたのですが、共通して思ったことは「後ろ向きな言葉が全くない」ということです。すごい心をうたれました。(薬学科3年・H.M)

•今でこそ公害病や身体障害に対する偏見や差別は少なくなってきているが、それでも完全になくなっていないわけではない。ましてや、当時は水俣病はうつる病気だといわれていたのだから、その苦渋は計り知れないだろうと思う。それにも耐えて懸命に生きてきた患者の方々に感動し、生きることに對して色々と考えさせられた。(薬学科3年・M.S)

•患者さんのお話を聞きながら、資料館で見た「チツソの人たちも救われますように」という言葉を思い出しました。その言葉をみたときは「なんて心が広いんだ」と思いましたが、心の広さの問題ではなく、患者さんがひどい苦しみを味わっているから、他者の苦しみを思いやれるのだと思いました。(薬学科3年・Y.A)